

## 特集：書評コロキウム 駒込武著『世界史のなかの台湾植民地支配— 台南長老教中学校からの視座』

米谷 匡史

YONETANI MASAFUMI

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

### キーワード

植民地研究 台湾 教育 駒込武

### Keywords

Colonial Studies; Taiwan; Education; Takeshi Komagome

*Quadrante*, No.19 (2017), pp.59-60.

本特集は、2016年3月17日に東京外国語大学・海外事情研究所で開催された「書評コロキウム 駒込武著『世界史のなかの台湾植民地支配』」の討議をもとに、コメントとリプライをあわせて掲載するものである。当日に書評者として発言した戸邊秀明氏、三原芳秋氏、水谷智氏、清水美里氏にコメント原稿をあらためて書いていただき、駒込氏からはそれをうけて応答の原稿を寄稿していただいた。

今回の書評コロキウムは、科研費共同研究「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティック」（代表：小川英文）と同志社植民地研究会、東京外国語大学・海外事情研究所の共催による企画である。植民地台湾がおかれた歴史的文脈を、大英帝国と日本帝国が対立をはらみながら交錯する「帝国のはざま」でとらえかえす本書の合評会を通じて、植民地研究／帝国史研究のあり方を多角的な視座で論議することを試みた。

ここでは、今回の合評会の前提として、駒込氏の前著『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）についてふりかえってみたい。当時は、『岩波講座 近代日本と植民地』全8巻（岩波書店、1992～93年）が刊行されるなど、既存の帝国主義論とは異なる視座によって、植民地研究／帝国史研究が新たに隆盛しつつあった。そのなかで駒込氏の著書は、植民地と帝国が関連しあう「植民地帝国日本」の歴史を構造的に分析する視座を提示し、大きなインパクトを与えるものとなった。

同書は、植民地教育史の視座を通じて、朝鮮、台湾、満洲、華北占領地を支配した植民地帝国日本が抱えた文化的葛藤を描いている。異民族統治に対応すべく、植民地の台湾・朝鮮では教育勅語の修正版が必要であるとする主張（井上哲次郎）への注目に見られるように、帝国支配の膨張がナショナリズム自体の葛藤を抱え込んだことが鋭く論じられていた。

すなわち、「帝国主義的な膨張が多民族的状況に否応なく顕在化させることで、統合の論理の見直しと再定義を不可避とした」のであり、「植民地帝国日本による異民族支配の歴史のうちに、ナショナリズムの自己否定の契機が胚胎し、自己矛盾を深めていく過程を明らかにすること」（8頁）が、同書の狙いの一つであった。

このような同書の枠組は、植民地帝国の研究を、「日本」のたんなる拡大・膨張の歴史としては描かないために、著者によって自覚的に選びとられたものであった。当時、隆盛しつつあった植民地研究／帝国史研究は、イギリスの帝国史(imperial history)研究がナショナルな枠組を超え出ることを標榜しつつ、イギリスを中心とした歴史像を再生産し、ネイションの拡大・膨張の追認になりかねない難点を持っていたように、ある問題をはらんでいた。日本史というナショナル・ヒストリーの枠組を超えて、東アジア・植民地と関連するトランスナショナルな歴史を描こうとしながらも、日本の拡大・膨張の痕跡をたんに後追いし再確認



するにとどまるならば、日本を中心とする歴史像の再生産に帰結してしまう。それは、日本史研究の「大東亜」への拡大版になりかねない。そのような叙述の枠組では、東アジアの植民地を領有しても放棄しても、日本という中心は揺るがないままとなる。

駒込氏の『植民地帝国日本の文化統合』は、そのような危うい難点にきわめて自覚的な問題提起の書となっている。「日本帝国主義による多民族支配にともなつて生じた諸矛盾が本国の制度や理念の変革・変質を促す」ような「膨張の逆流」に注目していること、そして、その「矛盾をさらなる「外」へと転化し、抑圧を移譲していく」ような「防波堤」をも論じていること、それらの仕掛けを通じて、「本国、植民地、占領地の政治的な構造連関を動態的に把握する」ことが、同書の大胆な問題提起となっていた（374～375 頁）。駒込氏の植民地研究／帝国史研究が、強い喚起力をもって注目されたのは、このような「帝国」の歴史への徹底した内在的批判の視座が提示されていたからであろう。

この前著以降、ほぼ 20 年ぶりにまとめられた新著『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2015 年）は、このような「帝国」批判の視座を、さらに鋭く豊かに深めるものとなっている。本書では、大英帝国と日本帝国という二つの「帝国のはざま」で、台湾の植民地経験を描きだし、そこから「世界史」像を刷新しようと試みている。これは上記のようなイギリス中心の帝国史、日本中心の帝国史の双方を否定するものであり、台湾の植民地経験そのものにより深く内在していくことによって、前著の枠組をも超え出るものとなっている。

その叙述の焦点となっているのは、植民地のミッション・スクールである台南長老教中学校の歴史であり、林茂生の生の軌跡である。そこには、日・英の両帝国が交錯する植民地状況において、「台湾人の学校」、台湾人の「自治的空間」をめざす試みがあった。そのひそやかな企てが、植民地帝国全体を巻き込む全体主義の圧力によって挫折を強いられていく経緯が、台湾、朝鮮、奄美、日本内地の相互連関をつうじて綿密に描き出されている。こうして刷新された植民地／帝国の構造連

関の枠組自体が、帝国日本という中心軸をかみくだき、台湾の植民地経験への内在をつうじて「世界史」を新たに構想する問題提起となっている。

今回の合評会は、このような本書がはらんだ豊富な可能性を、多分野が交わる討議をつうじて、多角的な視座で論議する企画である。それぞれの関心から、多くの示唆に富んだ刺激的なコメントを寄せていただいた戸邊氏、三原氏、水谷氏、清水氏、そして、その問いかけを正面から受けとめながら、展開し深めていくリプライを書いてくださった駒込氏に感謝したい。